

【記念口演】



桂吉坊 氏

(上方落語協会)

1981年（昭和56年）年8月27日、兵庫県西宮市生まれ。

1999年（平成11年）年1月10日に、桂吉朝に入門。

同年3月14日に「岡町落語ランド」において「東の旅～煮売屋」で初舞台。

2000年（平成12年）年4月から桂米朝のもとで内弟子修業。

2003年（平成15）年4月に内弟子を卒業。

以後、古典落語を中心に舞台を重ねる。

2007年（平成19年）にはG2プロデュースの舞台

「地獄八景 浮世百景」で役者としてもデビュー。

2008年（平成20年）公開の映画「能登の花ヨメ」では謎の旅人として映画デビュー。

2011年（平成23年）咲くやこの花賞大衆芸能部門受賞。

【大会シンポジウム】

——趣旨説明——

林 洋輔（大阪教育大学）

学問と、笑い。この取り合わせは一見してそれを読む者や聞く者に奇妙な響きを与える。だが笑いとは単に気分の弛緩や自らの内に生まれる喜びの端的な表現に留まるものではなく、人間と呼ばれる存在が折々に含み持つ複雑な心情の発露を表すものでもある。微笑、一笑、苦笑、爆笑、嘲笑、嗤笑。冷笑、憫笑、嬌笑、失笑、大笑、微苦笑、哄笑。「抱腹絶倒」や「呵呵大笑」、あるいは「頤を解く」「顎を外す」といった仮名遣いの用例まで含めるのならば、わが国が古来より育んできた言語としての日本語には実に多様な笑いの表現が見受けられる。小括的に言うなら、「笑い」とは完答の甚だ困難なあの問い——「人間とは何か」——に対してさえも回答へ一つの突破口を与えるものであろう。

ところで当学会は「身体運動文化」を学際的に取り扱う性格でありながら、人間における心身統合の証左ともいえるべき笑いに焦点化した検討はそれほど頻繁に行われることはなかったと言える。そこで本年のシンポジウムではわが国における笑いの都——というのも上方落語をはじめとした「笑い」により都市文化の創られてきたことが処々に確認されるから——である大阪の文化にも材を採り、「笑い」をテーマにシンポジウムが構成される。

森下伸也・関西大学人間健康学部教授は現在も「日本笑い学会」の会長職に就くことで、わが国における笑いの学術研究を牽引する。「笑い」研究を先頭に立って開拓する氏には今回の登壇において、「ひとはなぜ笑うのか？—笑いを科学する」との演題のもとでご講演いただく。本シンポジウムにおける幕開けとして総説的な角度から分野を横断し、氏の推進する「ユーモア学」を踏まえた議論にまず刮目したい。

山田奨治・国際日本文化研究センター教授はわが国における日本研究の碩学として、国際的にその研究成果が周知されている。和漢洋にわたる該博な見識より展開されるその著作は著作権をめぐる議論に対しても発揮されており、その研究業績はいずれもが日本文化研究および著作権研究における画期をなす。今回のシンポジウムでは「禅・日本文化における笑い」と題して行われる注目の講演である。

瀧一郎・大阪教育大学教授はわが国美学研究の重鎮として活躍を続ける哲学者・美学者であり、専門とするベルクソン研究は本国フランスでも高く評価されて今日に至る。近年では乗馬や落語といった文字通りの「身体運動文化」に対しても関心を深めており、今回の講演では長年の論究課題であるベルクソン研究についての最新の成果を踏まえ、「笑いの美学」と題して人文系諸学より新たな議論の地平をわが国学術界に拓く。

【大会シンポジウム：「愉悦を生きる人間～身体・文化・そして笑い～」】

【登壇シンポジスト・プロフィール（順不同）】



森下伸也 氏（関西大学人間健康学部教授）

日本笑い学会会長。大阪大学人間科学研究科社会学専攻修了。長崎大学助教授、ウイーン大学客員研究員などを経て、関西大学人間健康学部教授。専門はユーモア学、社会学。主要著作に『逆説思考』（光文社新書、2006年）、『もっと笑うためのユーモア学入門』（新曜社、2003年）、『社会学がわかる事典』（日本実業之出版社、2000年）など。



山田奨治 氏（国際日本文化研究センター教授）

筑波大学大学院修士課程医科学研究科修了。国際日本文化研究センター教授・総合研究大学院大学教授。京都大学博士（工学）。専門は情報学と文化交流史。主要著作に『マンガ・アニメで論文・レポートを書く：「好き」を学問にする方法』（ミネルヴァ書房、2017年）『東京ブギウギと鈴木大拙』（「第31回ヨゼフ・ロゲンドルフ賞」受賞作品、人文書院、2015年）、『禅という名の日本丸』（弘文堂、2015年）ほか。日本武道学会会員。



瀧一郎 氏（大阪教育大学教育学部教授）

パリ第I大学大学院人文科学研究科哲学史専攻（DEA）などを経て、大阪教育大学教授。東京大学博士（文学）。専門は美学、思想史。主要著作に「*Les Deux sources adossées à une esthétique de l'analogie*», *Bulletin of Death and Life Studies*, Vol.4, Au-delà de la philosophie de la vie, Les ateliers sur *Les Deux sources de la morale et de la religion de Bergson*, Global COE Program DALS, Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo, 2008. 「想像と類比—ベルクソンの直観の論理」『美学』224, 2006. 『ベルクソン美学研究—「直観」の概念に即して—』東京大学大学院人文社会系研究科 博士論文ライブラリー, コンテンツワークス株式会社, Book Park サービス係, 2002. など。